山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第102集

# 大師東丹保遺跡2

一般国道52号（甲西道路）改築工事
中部横断自動車道建設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1995. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

A
9
62

# 序

本書は建設省と日本道路公団のおこなう一般国道52号改築および中部横断自動車道建設工事にともなう発掘調査の概報であります。この工事区域には10箇所の遺跡がありますが、大師東丹保遺跡はこの内の南端に近い甲西町に所在しており、扇状地末端の湧水地帯に位置する遺跡であります。Ⅰ区～Ⅳ区まで長さ400mに及ぶ本遺跡の調査は平成５年度から２年次にわたって実施されましたが、本書は平成６年度調査の概要であります。

平成５年度のⅠ区とⅡ区では３面の文化層が調査され、中でも鎌倉時代中頃を中心とした第一面では、建物跡や水辺の祭祀跡・水田跡などが多くの木製品とともに発見され、生々しい中世世界が掘り起こされました。今回は引き続きⅢ区とⅣ区とを発掘いたしましたが、調査の結果、弥生時代・古墳時代・中世の３面の文化層が確認されました。第一面は鎌倉時代中頃を中心とした生活面でありまして、Ⅲ区では建物跡や水田跡・杭列、Ⅳ区では水路・杭列などが調査され、漆塗りの椀・下駄・草履などの木製の日常生活品、人形・斎串といった祭祀具などが出土しております。この層の下には古墳時代・弥生時代の層があり、特にⅣ区で発見された古墳は４世紀後半のものと考えられ、年代的にも、また低湿地に築かれているという立地からも、今後新たな問題を提起するものと思われます。Ⅲ区では弥生時代後期の終り頃の地震に伴う噴砂が調査され、Ⅰ区・Ⅱ区に続き貴重な資料が確認されております。今年度も多くの成果が得られましたが、皆様方の研究の一助になれば幸甚であります。

末筆ながら調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1995年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

# 目次

１．調査の経過
２．遺跡をとりまく環境
３．層位と時代
４．Ⅲ区の発見された遺構と遺物
５．Ⅳ区の発見された遺構と遺物
６．まとめ

# 例言

１．本書は、1994（平成６）年度に実施した山梨県中巨摩郡甲西町大師字東丹保から同町清水字川原田にかけて所在する大師東丹保遺跡の発掘調査概報である。遺跡はⅠ区～Ⅳ区に分かれるが、このうちⅢ区とⅣ区を対象としたものである。

２．調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

３．本書の執筆・編集は小林健二・小泉　敬（Ⅲ区）、保坂和博・松土一志（Ⅳ区）が行った。

４．Ⅲ区の地震跡の調査については、通産省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター主任研究官、寒川　旭氏にご指導・ご教示いただいた。

５．本報告書にかかる出土品・図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

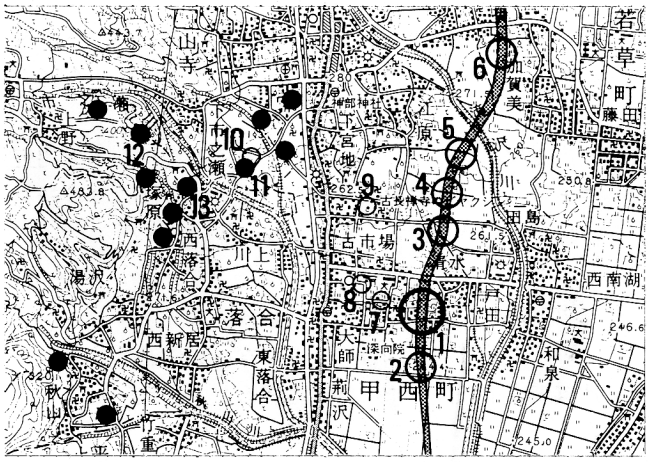
## 1．調査の経過

中部横断自動車道の建設は、甲府盆地西部においては建設省の実施する国道52号（甲西バイパス）改築工事と重なっている。このため山梨県教育委員会では、平成元年度から５年度までは建設省甲府工事事務所と協議・契約のもと発掘調査を実施してきたが、今年度からは日本道路公団とも協議・委託を行い事業を遂行することとなった。

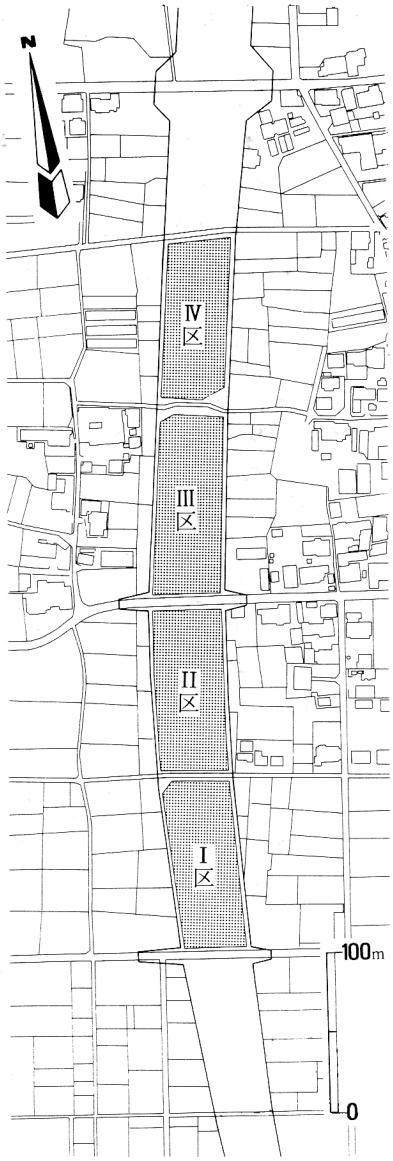
本遺跡は平成３年度の試掘調査により発見された遺跡である。調査区域が幅40ｍ、長さ400ｍと広いことから、既設の道路により概ね長さ100ｍごとに南からＩ区～Ⅳ区と区画し（調査区域図）、平成５年度にＩ区とⅡ区を、６年度にⅢ区とⅣ区の調査が行われた。Ⅰ区・Ⅱ区では、鎌倉時代の層から建物跡・水田跡・水辺の祭祀遺構・溝・杭列などが、下駄・漆塗り椀・呪符・人形など多量の木製品と共に発見された。また弥生時代の層では、地震による液状化の跡・火山灰の堆積などが確認され、いずれも大いに注目を集めた。Ⅲ区・Ⅳ区も、Ⅰ区・Ⅱ区同様調査区域を鋼矢板で囲み排水施設を設け発掘を行った。調査の結果、Ⅲ区・Ⅳ区合わせて３面の文化層が確認できた。鎌倉時代を中心とした層が第一面、古墳時代の層が第二面、弥生時代の層が第三面である。調査は年度初めから12月27日まで行い、平成７年１月から３月まで整理作業を実施した。

## 2．遺跡をとりまく環境（遺跡位置図参照）

本遺跡は、標高245ｍから250ｍを測り、甲府盆地の中でも低位の地域に位置する（１）。この一帯は甲府盆地西縁にある櫛形山から流れ出す幾筋もの小河川によって形成された扇状地の扇端部にあたり、豊富な湧水のもと弥生時代以降の遺跡が多く、住吉遺跡（８・弥生時代）、清水遺跡




遺跡位置図（●は古墳）



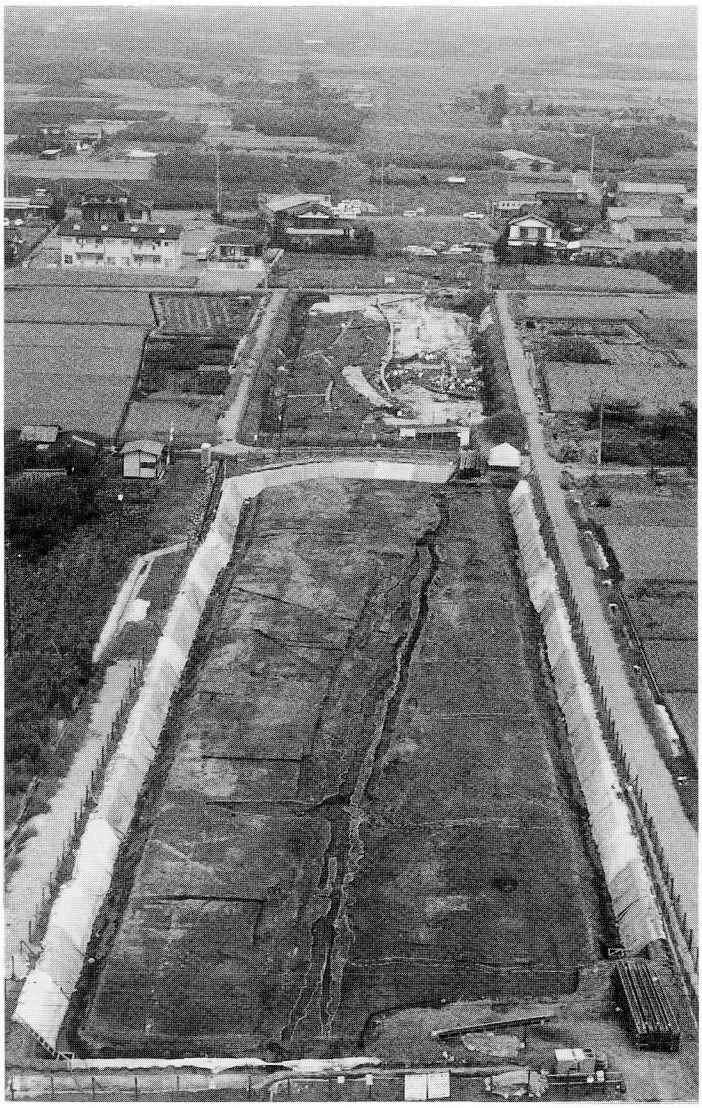

調 査 区 域 図

（7・弥生時代～中世）、鮎沢A遺跡（9・古墳時代）など、本遺跡と同時期の遺跡が近在する。

古代末から中世にかけても、甲斐源氏の一統が居館を定めた地域であり、古長禅寺のような戦国大井氏に関わる寺院もある。特に中世においては、本遺跡でも第一面で様々な遺構・遺物が発見されている。

さらに本遺跡の約100m南にある宮沢中村遺跡（2）では、中世の護岸とみられる網代列や近世の村・寺院跡などが調査されている。

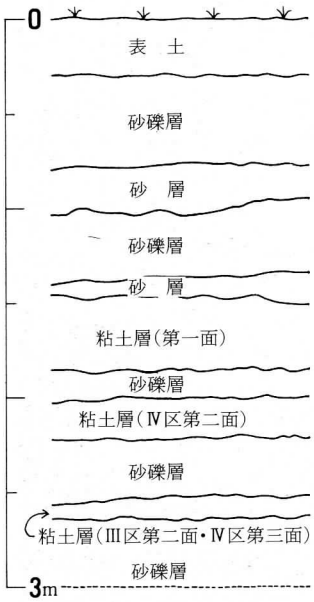
一方西側の山寄りには多くの古墳が点在する。このうち物見塚古墳（12）は峡西地域で最古（5世紀初頭）とされる前方後円墳であるが、今回Ⅳ区で発見された古墳と、年代的にも立地の上でも、両者の関係が注目される。その他は後期のもので、上村古墳（13）周辺は「塚原」という字名が示すように、かつてはさらに多くの古墳が存在していたとみられ、鋳物師屋古墳（11）一帯には積石塚古墳が群集していたともいわれている。また縄文時代の集落では、円錐形土偶が出土した鋳物師屋遺跡（10）がある。この他中部横断自動車道・甲西バイパスにかかる遺跡（1～6）は位置図に示した。



調査区全景（手前がⅢ区、奥がⅣ区）

## 3．層位と時代

南北に長い遺跡であり、また扇状地の扇端部ということもあり、各調査区間で層位は氾濫により必ずしも一定しておらず、様相が微妙に異なっている。今回はⅢ区で2面、Ⅳ区で3面の文化層が確認された。各面の間には、氾濫による砂礫層・砂層が厚く堆積している。土層断面模式図（3p）で説明すると、まず地表下1.5m程で第一面となる。この面は鎌倉時代中頃を




**土層断面模式図（1/40）**

中心とした層で、建物跡・水田跡・水路・杭列などが発見されている。次にこの第一面から50㎝程下げると、古墳時代前期末から中期初頭にかけての第二面となる。この面は今回Ⅳ区のみで発見された層で、Ⅰ区からⅢ区までは確認されておらず、砂礫層が続いている。またⅣ区では、第一面と第二面の間に両時代の遺物包含層が部分的に存在する。さらに第二面から50㎝程で、弥生時代後期末の第三面（Ⅲ区の第二面）となる。この層はⅢ区・Ⅳ区とも薄く不安定で残りが悪く、Ⅲ区で地震の跡が発見された以外は、明確な遺構は確認できなかった。

## 4．Ⅲ区の発見された遺構と遺物

［各時代の遺構と遺物］　鎌倉時代の第一面では、掘立柱建物跡1棟、水田跡8枚、溝10条、杭列3条などが発見された。調査区を南北に溝が走り、杭列が並行している。溝は北端から始まり、途中幾筋かに別れながらⅡ区へ続いている。また杭列も溝に沿っているが、氾濫により傾き、中には折れているものがあった。これらの溝・杭列を境にして、東側には水田が広がっている。東西畦畔で15～18mごとに区画され階段状に造られているが、南北畦畔は確認されていない。これに対し西側は遺構の残りは悪かったが、掘立柱建物跡が柱根を伴って発見されている。柱根も杭列同様氾濫でなぎ倒された状態で、大きく傾いていた。

**調　査　風　景**

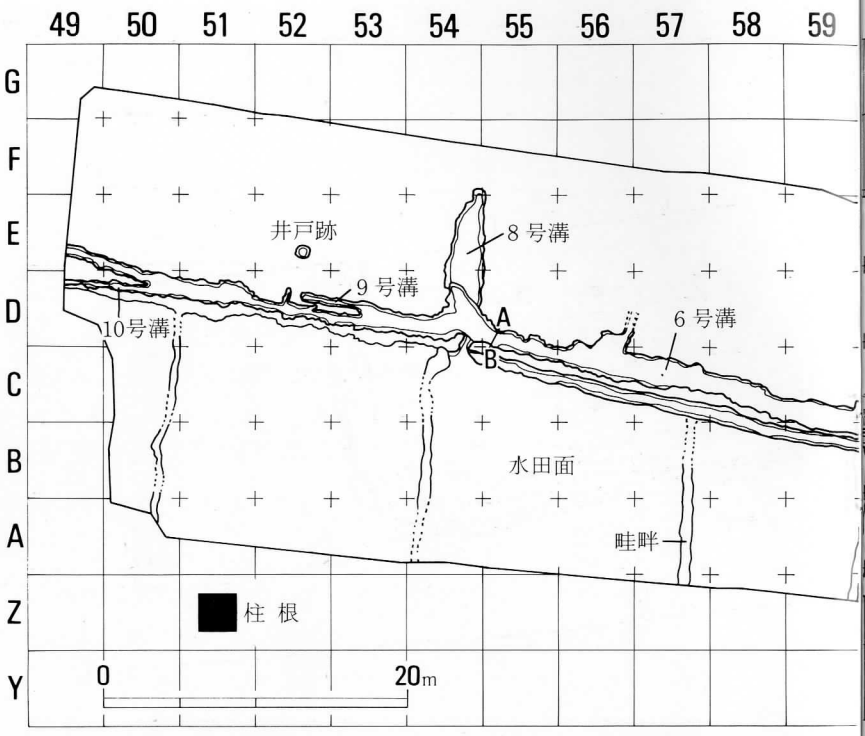
この他、南側では井戸跡1基が発見されている。石組みの小型のもので、出土遺物はなく時期の判断は難しいが、石がさらに上に数段積んであったとみられ、上記の遺構より新しい時期（戦国期か）のものと考えられる。

遺物は、下駄・草履状木製品・漆塗り椀をはじめとする木製品のほか、かわらけ・鍋・鉢といった日常雑器、中国製磁器（青磁・白磁）、銅銭（北宋銭）、動植物遺存体などが出土している。

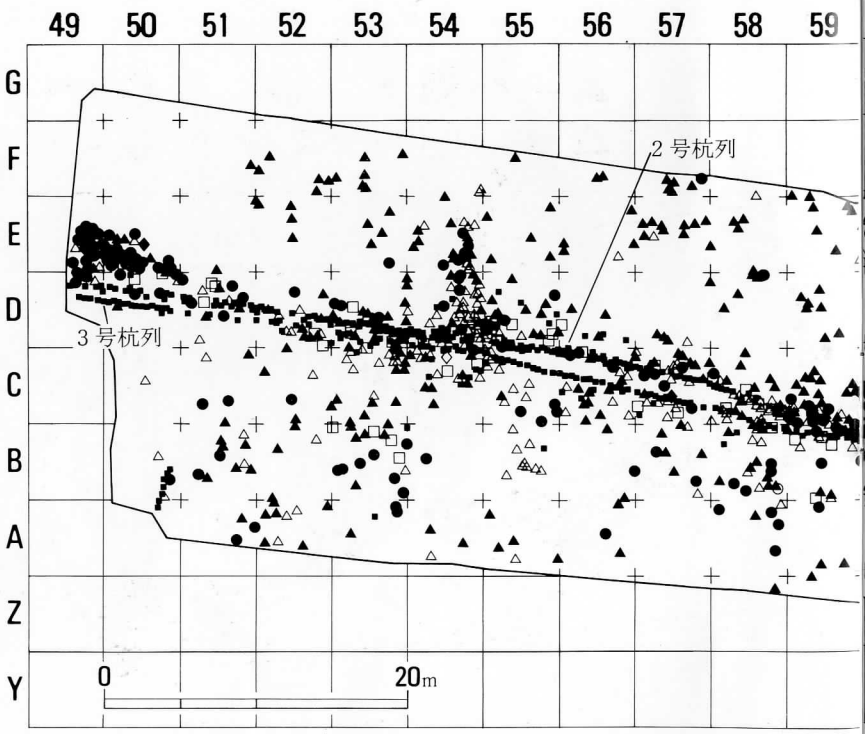
第二面（Ⅳ区の第三面）は、氾濫の影響がさらに大きく、調査区南側に薄い粘土層が広がっていたが、ほとんどの部分は流され残っていなかった。遺構もはっきりしなかったが、溝とみられる落ち込みと、地震による液状化の跡が確認されている。

地震跡については、第二面上が氾濫で著しく削られ、発生時期の判断は難しいが、第二面直上を薄い砂層が覆い、その上を古墳時代前期の土器片を含む砂礫層が覆っていることから、同時期の弥生後期末のものと考えられる。

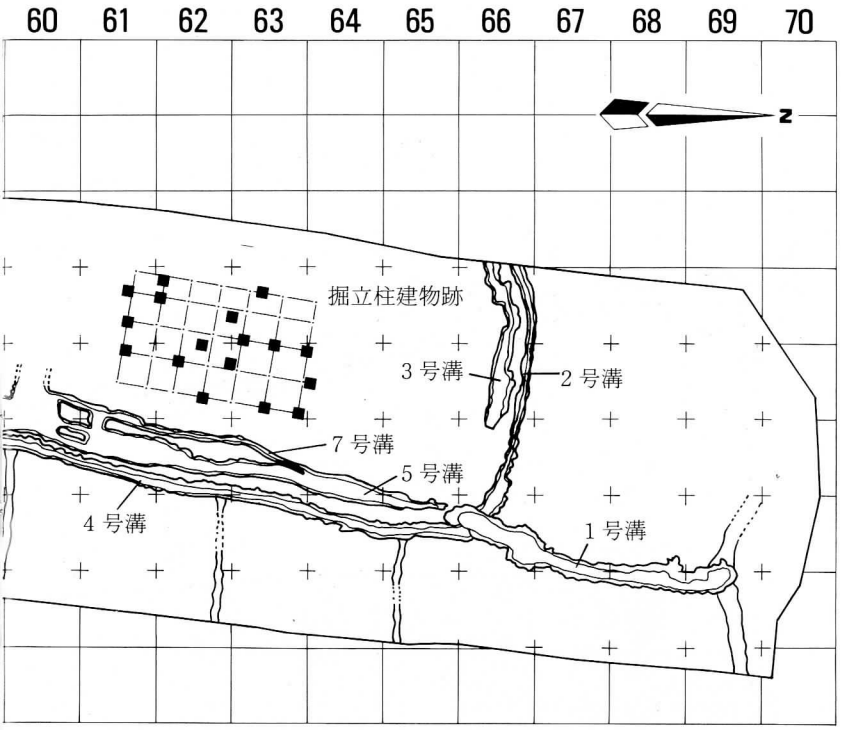
遺物は極めて少なく、流されて磨滅した土器片と、流木がわずかに発見されただけであった。



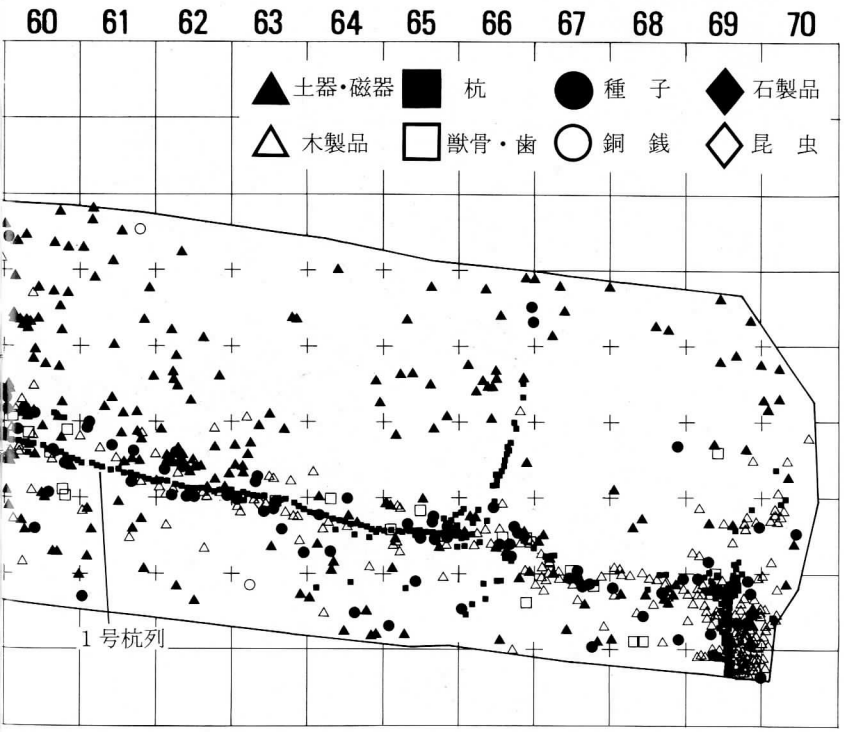

Ⅲ区 第一面




Ⅲ区 第一面




全体図（1/500）




出土遺物分布図（1/500）

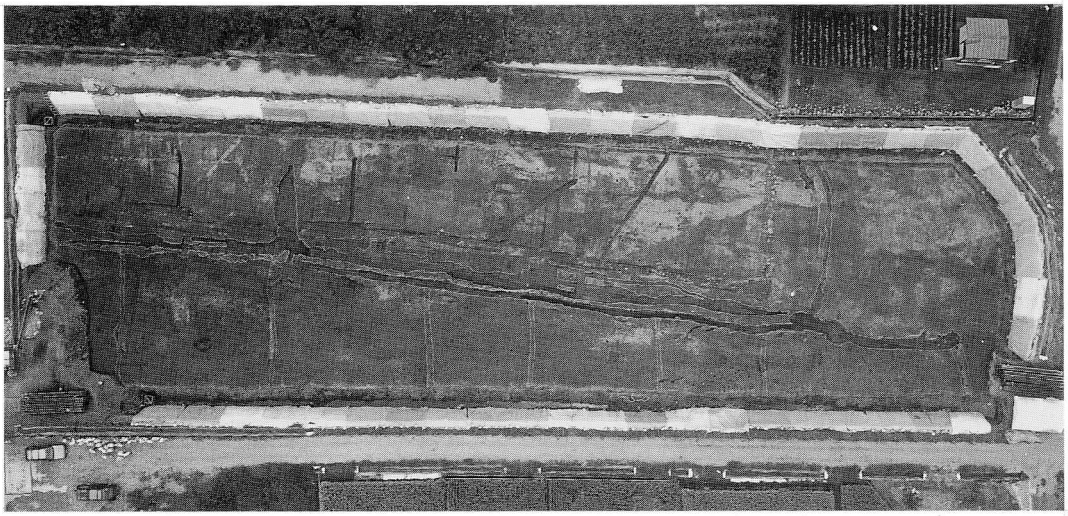
［第一面］　この面は、調査区を南北に走る溝によって二分されている（図上）。

旧地表は北から南へ緩やかに傾斜しており、溝は北東から南西方向に流れている。また遺物分布図（図下）を見ると、杭が溝に沿って打たれており、北端の畦畔中にも何本もの杭が打たれ、補強してあるのがわかる。

溝・杭列を挟んで西側は、後世の削平などにより撹乱を多く受け、粘土層の堆積も薄く残りが悪かったが、発見された掘立柱建物跡には柱根が残っていた。やや並びが不規則な部分があるが、東西４間（柱間約２ｍ）、南北６間（柱間約2.2m）の大型の総柱建物とみられる。

東側に広がる水田跡は、地形を利用して階段状に造られている。大きな区画を有するものとみられ、東西畦畔は確認されていない。Ｉ区での状況を考慮すると、１枚の区画は一辺が約15mの正方形になるものと考えられ、これは調査区外にある現代の水田の区画とほぼ同じである（６ｐ写真１下端）。

遺物は調査区のほぼ全面から出土しているが、杭を含め特に溝とその周辺からの出土が多い。

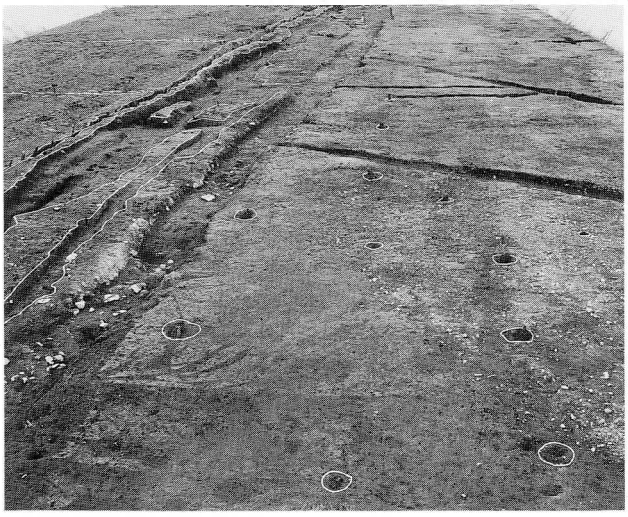


1．第一面全景

［掘立柱建物跡］　残りが悪い遺構ながらも、柱穴の並びが部分的に検出できた（写真２）。半截したところ、柱穴が確認できなかった部分を含め、17点の柱根が残っていた。概ね15㎝角前後のものが多く、縄掛け溝を持つものもある（写真３）。腐朽して残っていない部分は、土層断面からその痕跡が確認できた。

昨年度Ⅱ区で発見された掘立柱建物跡の柱根は、角を面取りした立派なもので、「屋敷」であったことを窺わせる。しかし今回Ⅲ区で発見されたものは面取りはなく、身分的な違いを感じさせる。水田跡にも近いことから、あるいは水田に伴う倉庫だった可能性もある。

大きく斜めに傾いている柱根は、大洪水に見舞われ、なぎ倒されたとみられる。大きな建物であっても、自然の力の前ではどうすることもできず、一瞬にして倒壊してしまったようである。



2．掘立柱建物跡

3．柱　　根

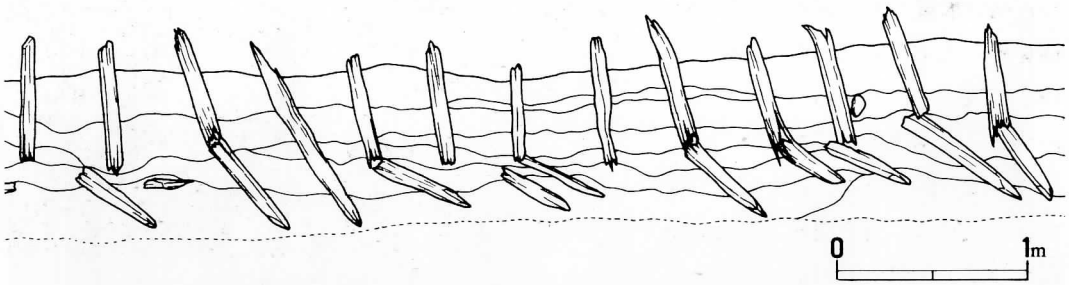
［水田跡・溝・杭列］

各水田面は氾濫により荒れており、溝からの取水口を一ヶ所持つが、各水田間に水口が設けられていたかどうか、はっきりわからない。しかし階段状に造られていることから、各水田面をオーバーフローさせ水を供給していたとも考えられる。

水路とみられる溝であるが、Ⅳ区から続いてくるものではないことから、水を供給するためばかりではなく、区画としての性格も考慮したい。

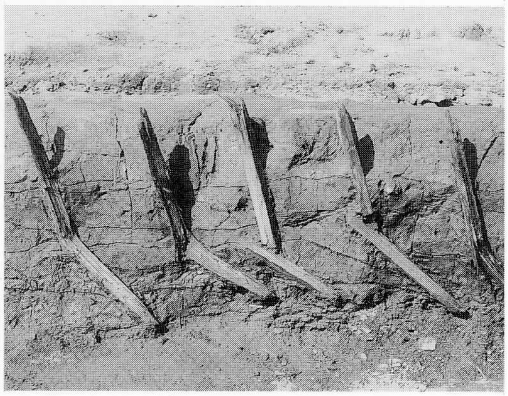
1．水　田　跡

溝の土手に沿って、護岸として打たれた杭列であるが、柱根同様洪水により杭は大きく傾き、中にはくの字に折れているものがあり（図および写真３）、その折れ方には疑問が残る…。




１号杭列側面図（部分）（1/40）

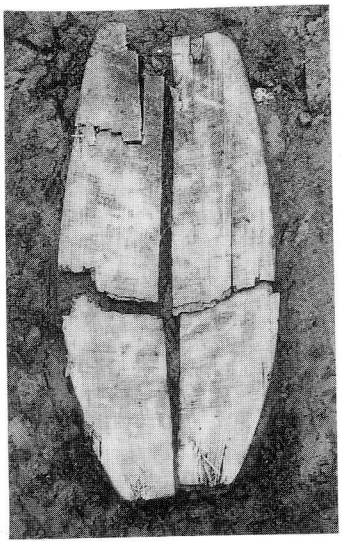
２．４号溝と１号杭列



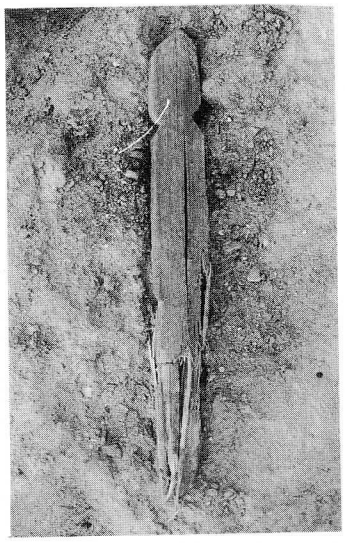
３．１号杭列（部分）

［日常生活品と祭祀具］

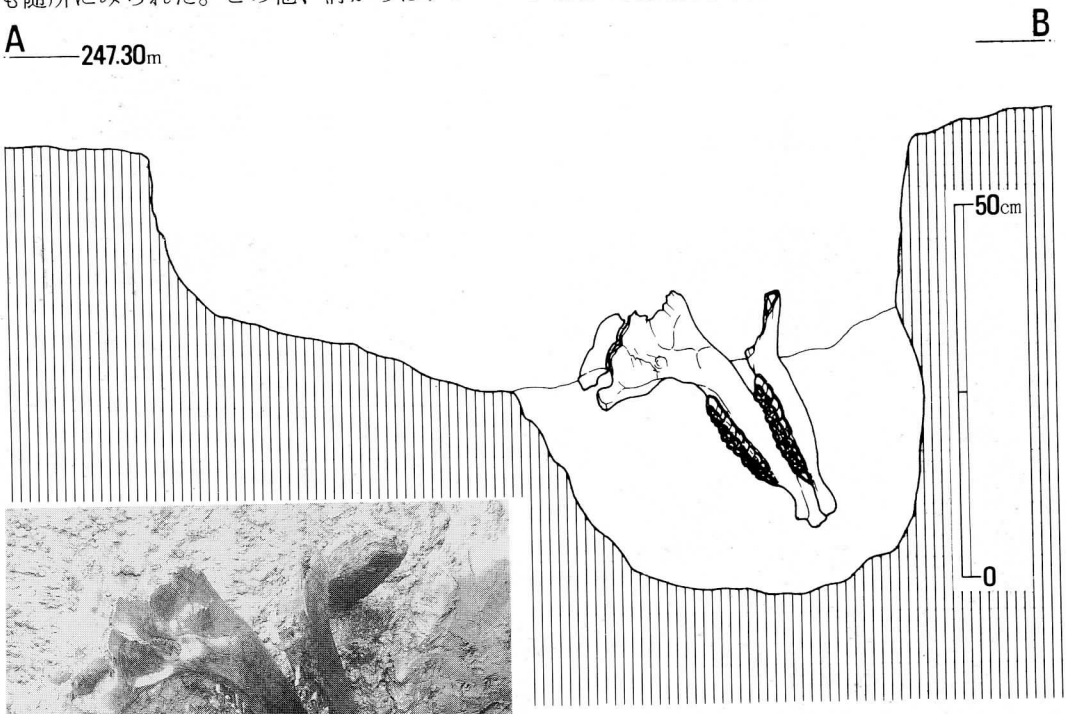
調査区の約半分が水田跡という性格上、遺物は少ない。とはいえ下駄・草履状木製品（写真１）など、出土する木製品の残りは良好であった。土器類は13世紀中葉～後半を中心とした手捏ね成形のかわらけ・甕・鉢類で、在地品を始め、常滑窯系・山茶碗窯系のものが多い。輸入磁器類は、龍泉窯系の青磁蓮弁文碗の他、白磁口兀げ皿なども出土している。またこれらはII区に比べ祭祀的な側面も弱い。しかし溝とその周辺からは人形（写真２）、斎串、ウマの下顎骨（図および写真３）、モモ核など、祭祀との関わりを示唆するような遺物も随所にみられた。この他、溝からはゲンゴロウなどの昆虫類も確認されている。



１．草履状木製品



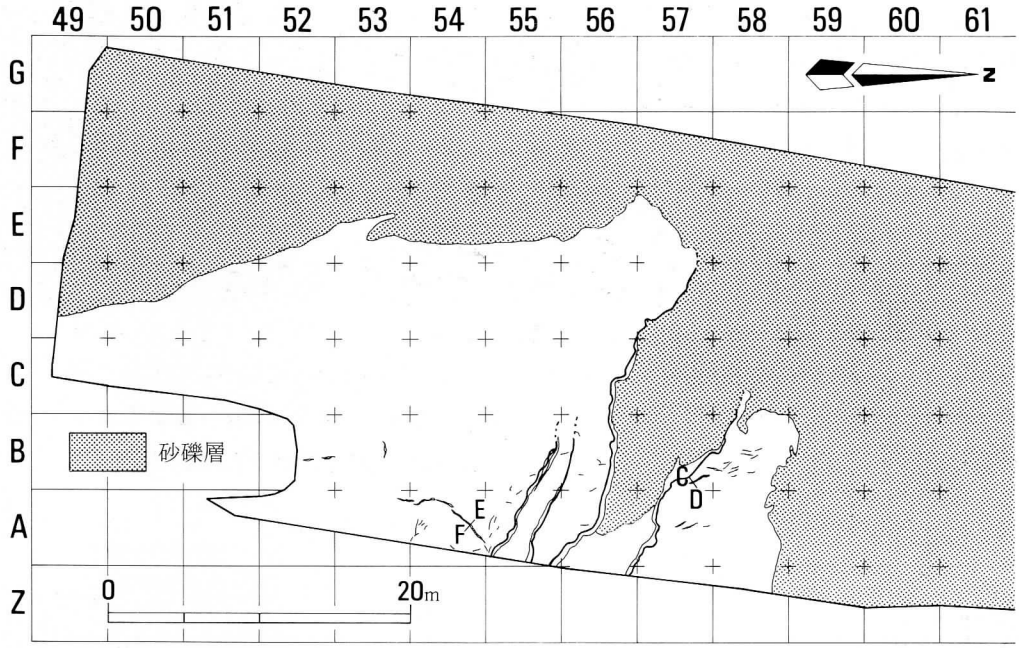
２．人　　形




６号溝出土 ウマの下顎骨側面図（1/10）

３．６号溝出土 ウマの下顎骨

［第二面］　弥生時代後期末の面は、ほとんどが砂礫層で覆われ、荒れ果てた状態であった。調査区南西側にわずかに薄い粘土の堆積が認められた（図および写真）。溝とみられる落ち込みは東西方向に２条流れているが、１条は大きく削られており、溝かどうかはわからない。遺物は、磨滅した壷・台付甕などの土器片が数点と流木であった。このような中で注目されるのは、既にＩ区でも成果をあげている、地震による液状化の跡であろう。

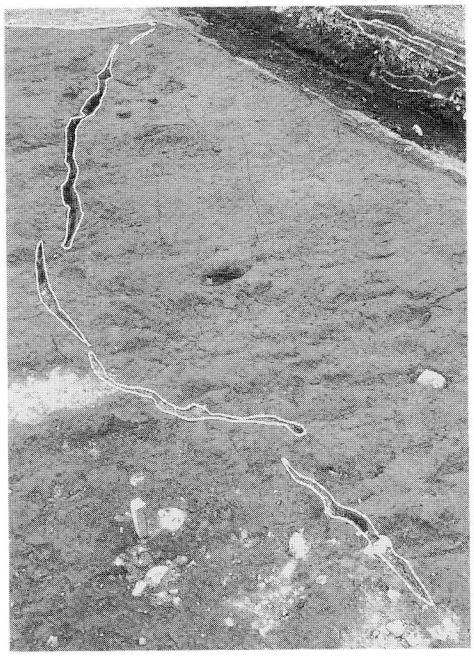



第二面全体図（1/500）

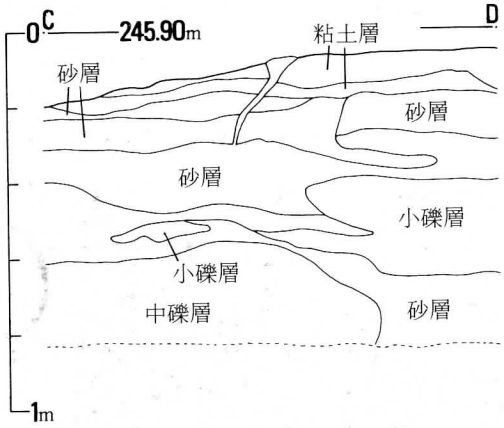
第 二 面 全 景

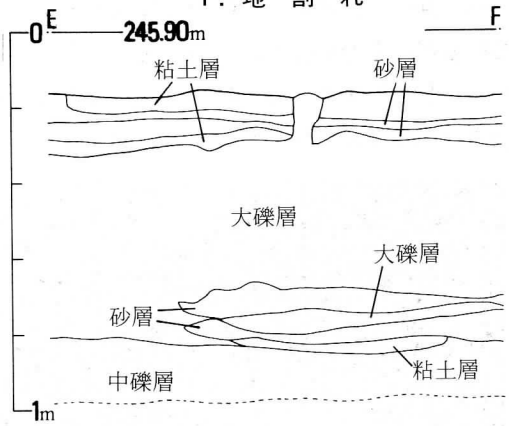
［地割れと噴砂］　今回確認された地割れは、調査区南西端に集中している（９ｐ図および写真）。大・小様々な亀裂があり、方向も定まっていない。これらの断面をみると、当時の地表下の、それほど深くない20～30㎝の層から砂や礫が昇ってきている。層の状況により、真っ直ぐではなく斜め上方に向かう砂脈（図左および写真２）や、中には最大径15㎝の礫を含んだ砂礫が液状化し噴砂となっている箇所も観察できた（図右および写真３）。地震の規模の大きさを物語るものである。液状化した層以外の部分でも、土圧や地下水の影響も加わり、層位が乱れている。

極めて残りの悪い状況下で調査された地震跡であるが、その成果は重要であり、今回も貴重な資料を提供することになった。

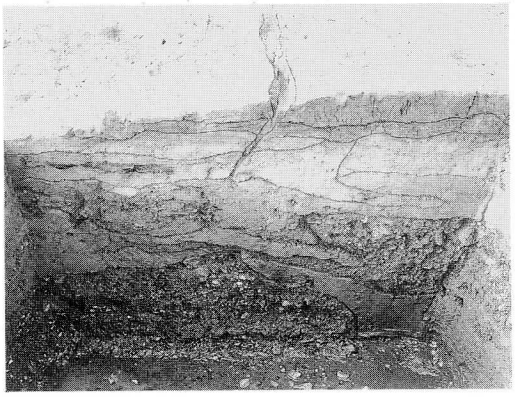


１．地　割　れ




地割れ断面（噴砂）図（1/20）



２．　　地割れ断面（噴砂）　　３．

## 5．Ⅳ区の発見された遺構と遺物

［各時代の遺構と遺物］　Ⅳ区はⅢ区の北側に隣接する幅約40m、長さ約95mの範囲である。

この地域は滝沢川および坪川の氾濫によって形成された砂礫層が現地表下に幾重にも堆積している。Ⅳ区ではこの砂礫層の間より鎌倉時代、古墳時代、弥生時代にそれぞれ比定される文化層が確認され、調査を行った。

鎌倉時代の第一面では水田経営に関わる水路、杭列などの生産域や氾濫からこれらの生産域を守るための護岸補強用杭列などが確認されており、中世における水との闘いに生きた人々の暮らしぶりが窺えられる。遺物は曲物、漆塗りの椀、盆などの生活用具をはじめとする木製品やかわらけ、鍋などの土器片、中国製磁器（青磁・白磁）、銅銭などが出土している。

古墳時代の第二面では氾濫による厚い砂礫層により埋没した古墳が１基発見され、墳丘部下段斜面より多量に有段口縁壷（壷形埴輪）が出土している。また墳丘裾部周辺からは土器集中地点が２箇所確認され、小型丸底壷、高坏、大型甕などが出土している。

弥生時代の第三面は氾濫の影響で文化層が不安定な堆積状況を呈しており、遺構は検出されず、僅かに土器片および動・植物遺存体が出土しているだけである。

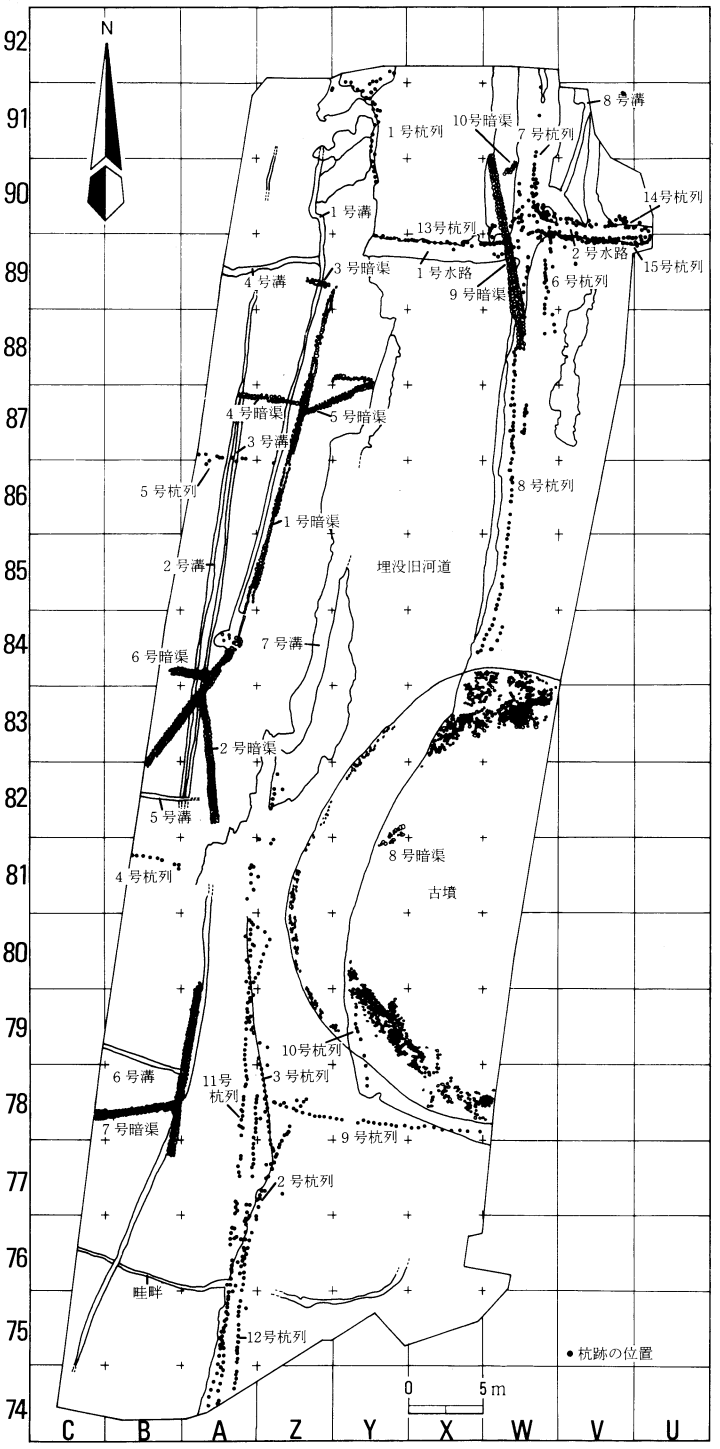
［第一面］　鎌倉時代の第一面は現地表下約1.5mに存在し、氾濫による砂礫層に厚く覆われているが、平均40cmと比較的安定した堆積を呈している。遺構は畦畔１条、水路２条、杭列15列、溝状遺構８条などが確認され、調査区西側半分の微高地上を中心に展開している。また墳頂部を氾濫により削平された古墳墳丘部（半円形に巡る葺石）が50cm程の高さで遺存している。

調 査 区 全 景（手前がⅣ区、奥がⅢ区）

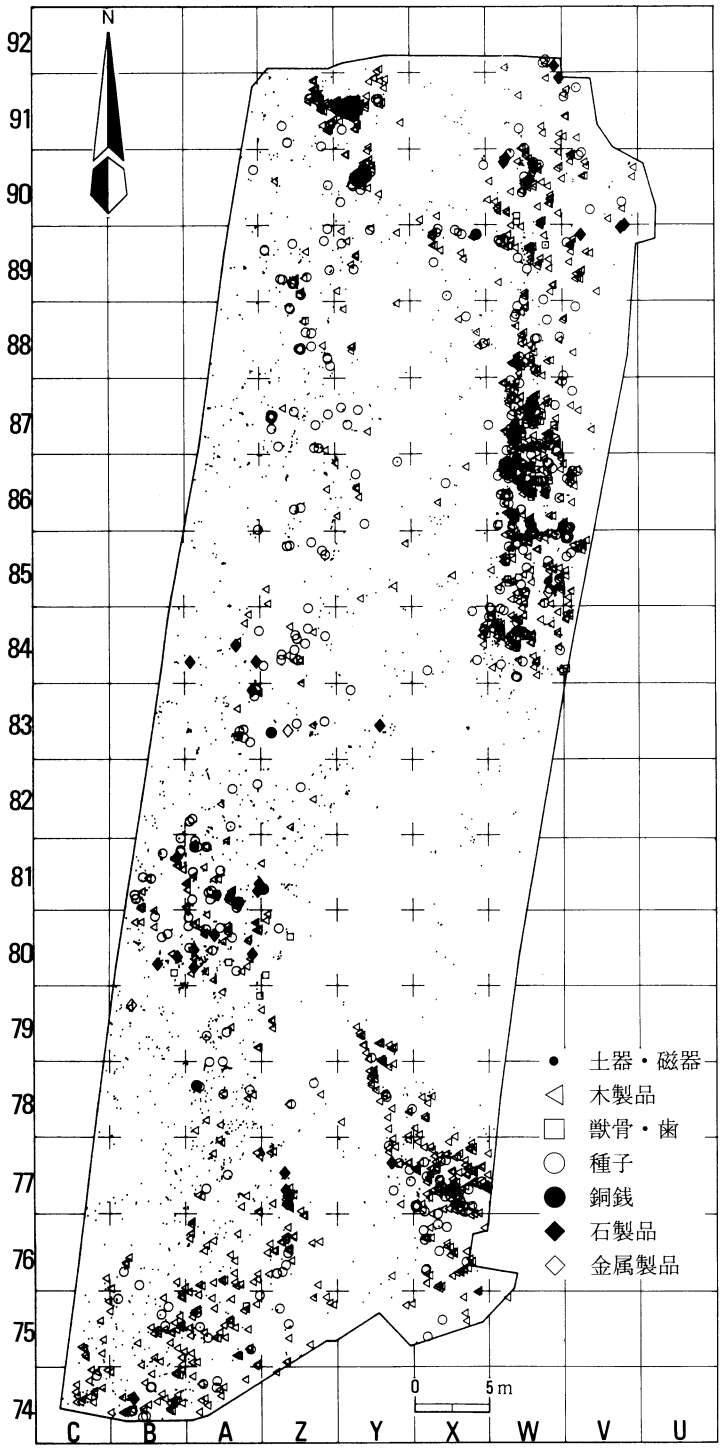
［水田跡］　調査区南西部の微高地に氾濫の影響で遺存の悪い10m程の畦畔がみられる。Ⅰ・Ⅲ区の検出状況より、一片が15m程の区画の大きな水田とみられる。この地域一帯は滝沢川の氾濫による大きな被害を受ける反面、肥沃な土地であり、古く弥生時代（Ⅰ区で弥生後期後半の水田跡が発見されている）より稲作が行われていたようである。

［杭列］　水路に伴うもの（15ｐ写真１）と氾濫から生産域・居住域を守るための護岸補強用に構築されたもの（15ｐ写真２）がある。後者には一定間隔に杭を打ち込み、しがらみ（松の小枝）や幅約10㎝、厚み３㎜程の板材を２段以上に積み上げたものがみられる。水を治め、水を利するために大きな労力が費やされていたことが窺われる。こうした水との宿命的な闘いの過程で河川処理の技術は発展し、後の武田信玄による釜無川、御勅使川の氾濫に対する治水策（護岸水制など）へと受け継がれていったのであろう。

［暗渠］　第一面からは明治時代後半に構築された暗渠も検出されており、水との闘いの歴史の長さが感じられる。

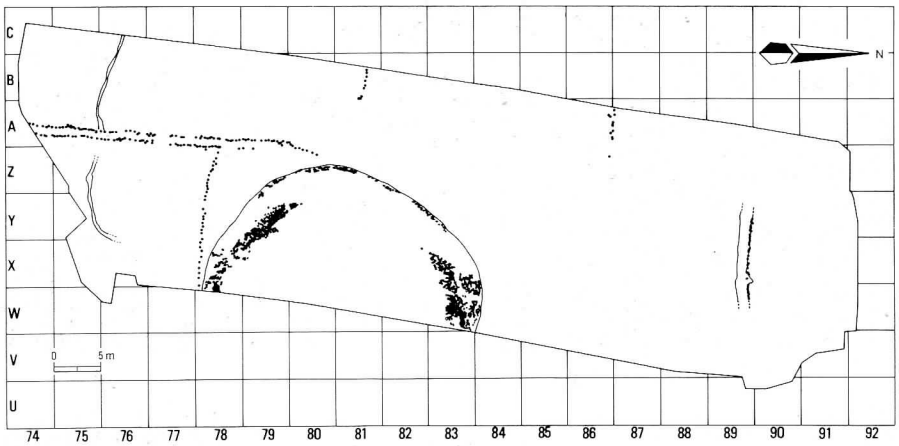



Ⅳ区 第一面全体図（1/500）

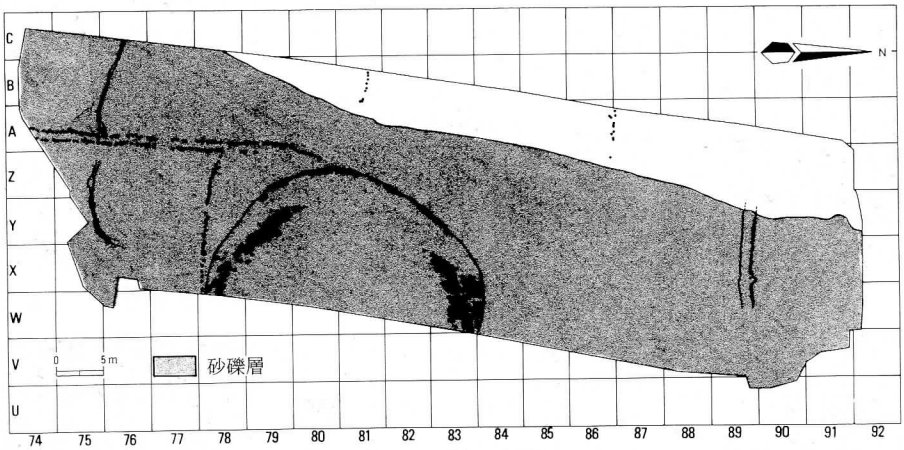



Ⅳ区 第一面出土遺物分布図(1/500)

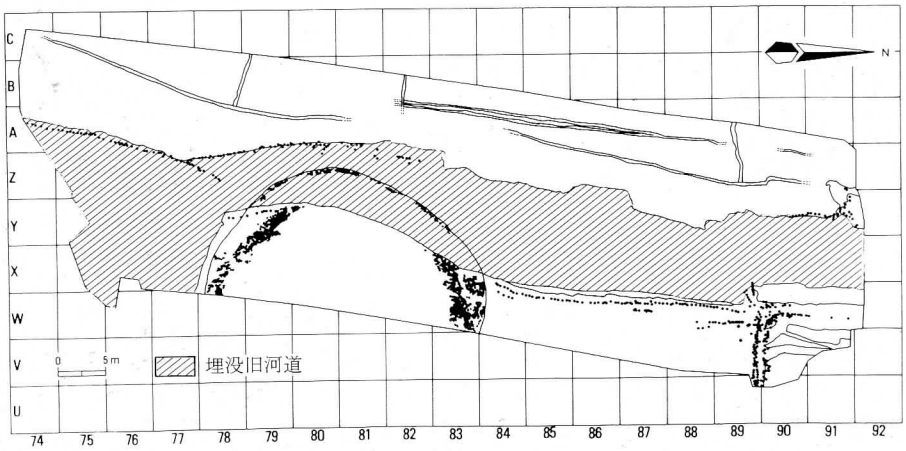
［遺物］　遺物は墳丘北部に集中して出土し、調査区中央部（南北方向）にほとんど見られない状況である（左図）。これは周辺河川の氾濫による複雑な水成堆積の影響と考えられる。土器類は地元生産品のかわらけや土鍋等のほか、他地域からの搬入品として平安時代後期の猿投・美濃の灰釉陶器（椀・皿類）をはじめ、鎌倉時代初頭の渥美・常滑（大壷・広口壷）、鎌倉時代中期以降（13世紀中葉から後半）の常滑（大甕・広口壷・片口鉢）などの東海地方の諸窯で生産された陶器類、龍泉窯系の青磁・白磁（碗・皿類）の舶載陶磁器類、等の存在が確認されている。木製品は下駄、曲物、漆塗りの椀（15ｐ写真６）等の生活用具や斎串などの祭祀用具及び建築用部材（15ｐ写真３）が出土し、現在解読中の木簡も１点ある（15ｐ写真４）。石製品は五輪塔（火輪・水輪各１点、地輪２点）があり、水輪の四周には、「バ・バー・バン・バク」が彫出され、上面にはこれらの種字に添う形で「東・南・西・北」の墨書がみられる（15ｐ写真７）。動・植物遺存体は馬などの歯・骨、甲虫類の昆虫、モモ・クルミ・ウリ等の果実、堅果、瓜類が出土している。




第一面 第一段階

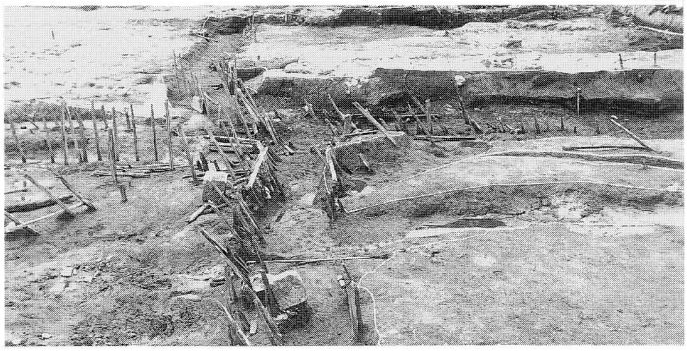



第一面 第二段階

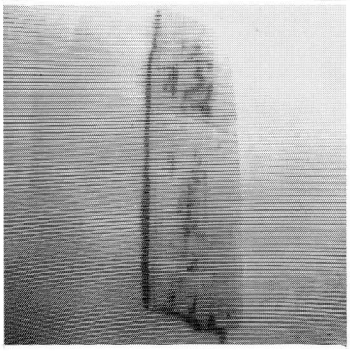



第一面 第三段階

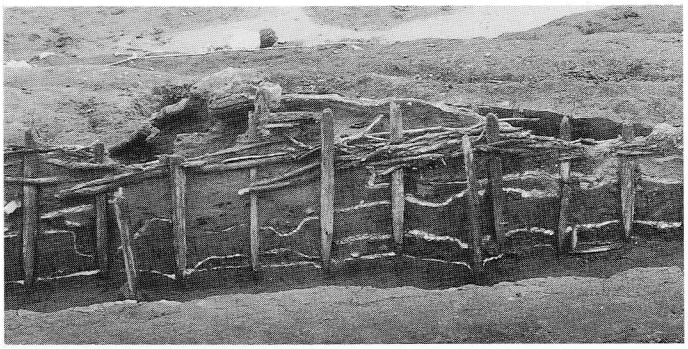
［遺構の変遷］　第一面の遺構の遺存状況からは、第一段階として水路などが築造され、水田経営がなされ、第二段階として氾濫がこれらの生活域および生産域に襲いかかり、第三段階として氾濫から守るための護岸補強用の杭列が築造され、調査区中央部を南北に縦断する河道が形成されたことが考えられ、水との闘いに生きた人々の姿が想い起される。



1．２号水路（東側から）



5．木　　簡

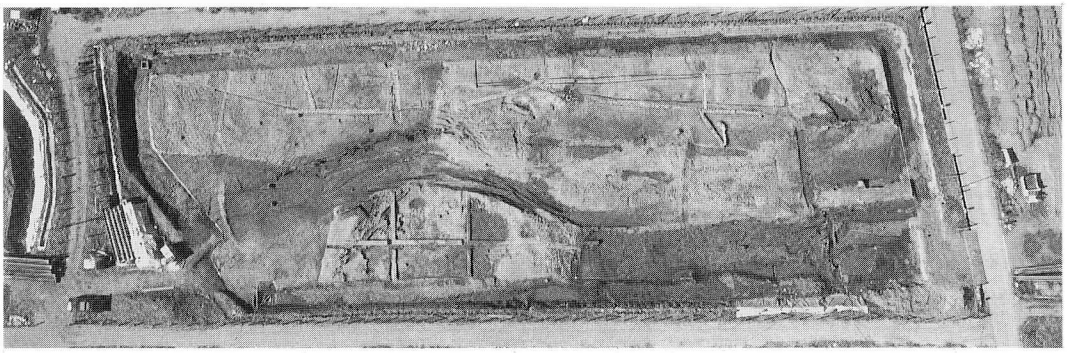


2．２号杭列（西側から）

6．漆　　椀

3．木製品出土状況（東側から）

7．五輪塔（水輪）



4．第一面全景

［第二面］　古墳時代の第二面は現地表下約２ｍに平均10㎝と不安定な堆積状況で確認され、墳丘裾部周辺のみに存在しており、当時よりこの地点が氾濫原の中における微高地であったことを示唆している。遺構は古墳１基と墳丘裾部周辺に土器集中区が２ヶ所確認されている。遺物は古墳から墳丘裾部周辺より多量に有段口縁壷（壷形埴輪）の破片が出土し、土器集中区から小型丸底壷、高坏、大型甕などがそれぞれ出土している。

［古墳］　氾濫により運び込まれた砂礫層下に埋没していた古墳が１基発見されている。

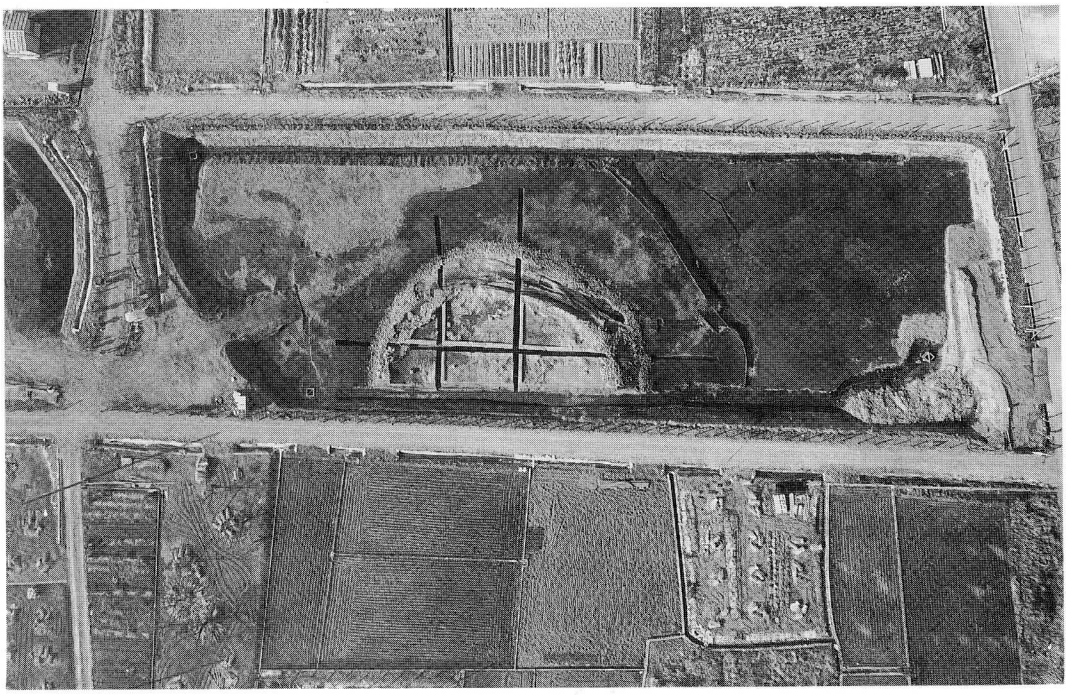
〈形状・規模〉　墳丘の東側が調査区へ展開しているため、明確な規模・形状は不明であるが、調査区内の遺存状況および地中探査[注1]の結果より円墳になる可能性が強いと思われる。規模は残存部での最大径が約36ｍ、高さ１ｍを測る。墳頂部および墳丘部北側と西側は氾濫により激しく削平され、北側は葺石が崩れ落ち裾部周辺に散乱し、西側は裾部のみ遺存している。

〈内部主体〉　主体部は確認することはできなかったが、調査区域外に存在する可能性も残している。

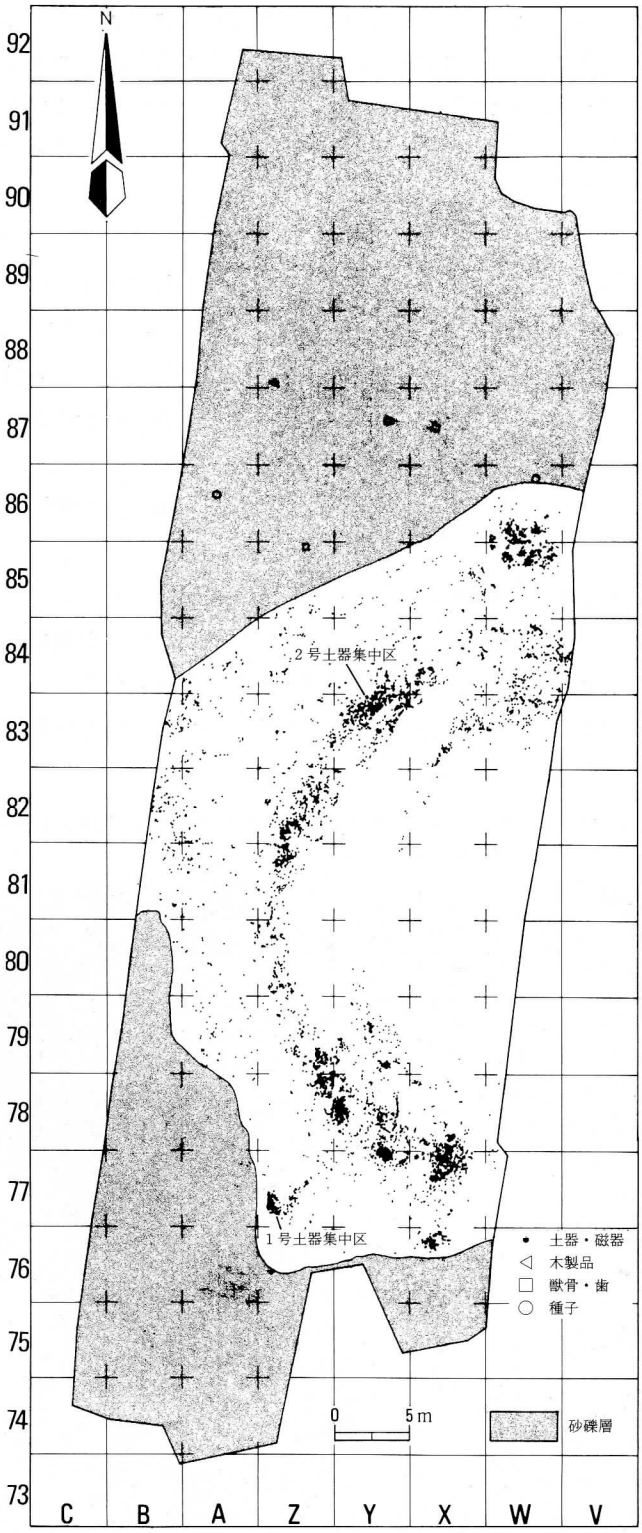
〈墳丘構造〉　遺存部における墳丘の構築は版築によるものではなく、地山を利用していることが墳丘の断面観察より捉えられる。すなわち、低湿地の中の比較的高い場所（微高地）を利用して構築されたと考えられ、これは第二面の文化層の遺存状況からも窺えられる。

〈外部施設〉　葺石は墳丘裾部斜面で確認され、10～20㎝大の河原石が多用されているが、葺方には規則性はみられない。また周溝については検出されていない。

注１　探査は電磁探査（200・100MHz pulseEKKO 400v）、電気探査（２極法 RM15 50v）を行った。電磁探査の結果、調査区域外にも円墳が展開していることが不明瞭ながら確認されている。



第二面全景

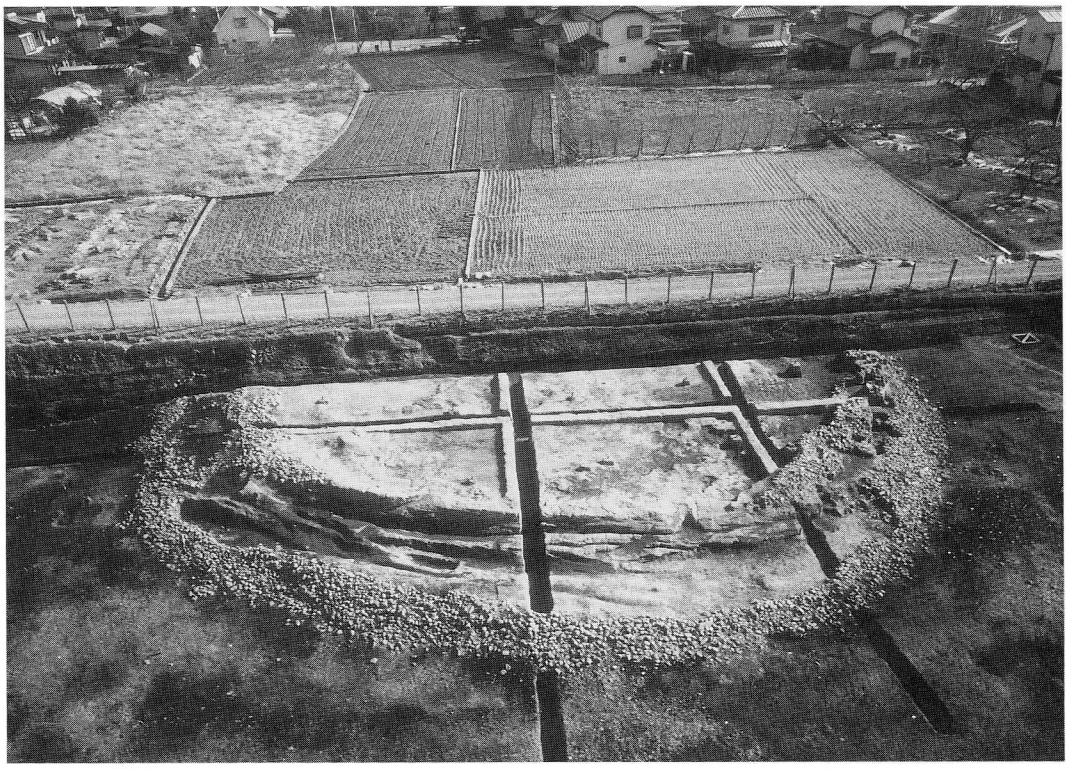



Ⅳ区 第二・三面出土遺物分布図（1/500）

〈出土遺物〉　本古墳からは、形態および大きさのほとんど変わらない有段口縁壷が墳丘裾部に部分的に配列されたような状況で出土しており（左図）、円筒埴輪と同様の機能を持つ壷形埴輪と考えられる。また底部には焼成前に開けられた円孔がみられる。これは葬送用の仮器化を意図したものであり、壷形埴輪の特徴といえよう。形態はやや張りのある胴部に有段口縁を持ち、外面は刷毛目調整がほぼ全面にみられる。口縁部から肩部にかけて赤彩が施されたものもある（19ｐ写真４）。

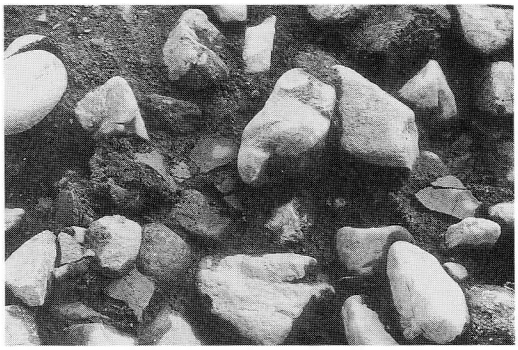
これまで県内の古墳で壷形埴輪が確認されていたのは４世紀後葉の前方後円墳の甲斐銚子塚古墳である。この古墳の壷形埴輪は有段口縁と胴下半部に巴形透孔が、胴上半部に円形透孔が、底部に焼成前の円孔が開けられ、埴輪的な要素が強くみられる。墳形、石室の構造等は東日本の古式古墳としては畿内的色彩の濃いものと考えられ、埴輪に関しても畿内先進地域に発達した埴輪樹立の制式が導入されたのであろう。

今後、甲斐銚子塚古墳における壷形埴輪等と合わせ、県内における初現期の埴輪のあり方を探っていきたい。

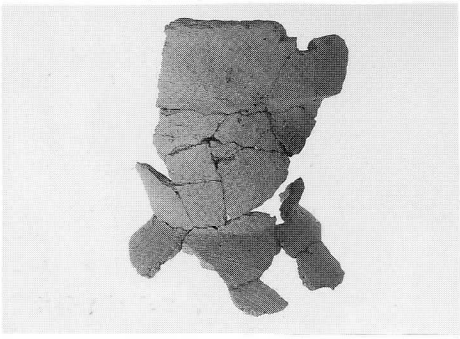


1．古墳遠景（西側から）

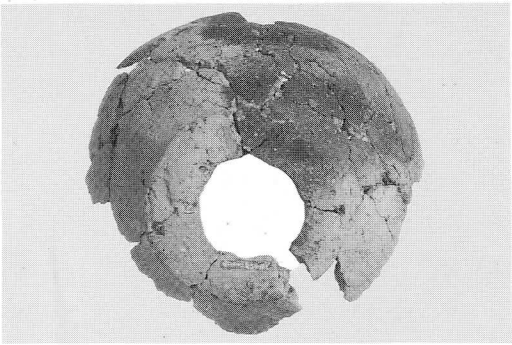
2．葺　　石（墳丘西側裾部）



3．壷形埴輪出土状況



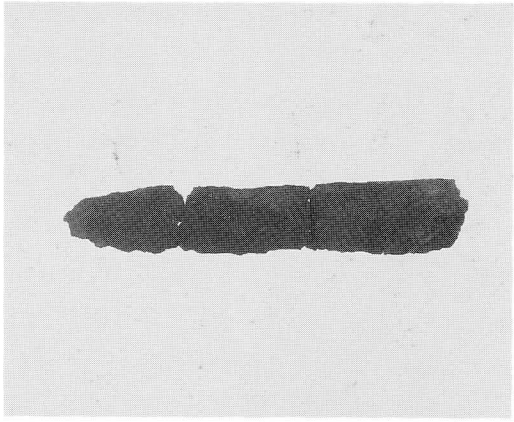
4．壷形埴輪（口縁部）



5．壷形埴輪（底部）

1．1号土器集中区遺物出土状況

2．1号土器集中区出土遺物(1)



3．1号土器集中区出土遺物(2)

［土器集中区］　墳丘裾部周辺より2ヶ所の土器集中区が確認されている（17p第二面 出土遺物分布図）。

1号土器集中区（写真1）は墳丘の南側裾部より南西へ6mの地点（Z－77グリット）に存在し、掘り込みなどは確認されず、フラットな面に小型丸底壷、高坏、大型甕など合わせて6個体（写真2）と刀子（写真3）と思われる鉄製品1点が検出されている。本遺構の年代の拠り所とした高坏は大型なもので、坏部が大きく外方に開き、下半及び中央部に稜を有し、脚部は柱状及び朝顔状に外反するものであり、内外面にナデ後ミガキ（暗文）の調整がみられる。

2号土器集中区は墳丘の北西裾部付近（Y－83・84グリット）に存在し、高坏が4個体程検出されている。

これらの土器群は山梨における古墳時代の土器編年のⅣ期（西田式）の新相[注1]に位置づけられ、4世紀末から5世紀初頭の範疇と考えられる。また1号土器集中区からは高坏、刀子などの出土により祭祀的な行為がなされた可能性が示唆され、今後、壷形埴輪の年代等と合わせて古墳との関わりについて、さらに検討していきたい。なお、近在する鮎沢A遺跡の住居跡からは本遺構と同時期の遺物が出土しており、周辺における遺跡の広がりが窺われる。

注1　中山誠二　「甲府盆地における方形低墳丘墓残存に関する一考察」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店　1989

［第三面］　弥生時代後期末の第三面は現地表下約2.5mに存在し、氾濫による影響のため僅か10㎝程の厚さの不安定な堆積状況を呈している。調査は第二面（古墳時代）の文化層が検出されなかった調査区北部（17p　出土遺物分布図に示された北側の砂礫層の下部）で行われた。遺構は検出されず、砂礫層に混入している土器片および動・植物遺存体が僅かに出土しているだけである（17p　第二・三面出土遺物分布図）。

## 6．ま と め

今回の調査では弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の文化層が確認され、低湿地における人々の様々な営みが浮き彫りにされた。

鎌倉時代では居住域（掘立柱建物跡・井戸跡など）と生産域（水田跡・水路跡など）が検出され、低湿地での安定した生活を送るために水との宿命的な闘いを繰り広げた人々の生々しい生活ぶりが明らかにされた。また周辺地域に比して豊富な舶載陶磁器類や国産陶器類が出土しており、これらの様相からは上層階級の存在が荘厳させられる。今後はこの地が甲斐源氏一統の居館を定めた地域であることも考慮し、本遺跡の性格を検討していくと共に、本遺跡がどのような形で中世陶磁器における消費経済との関わりを持っていたのかを探っていきたい。さらに他の遺跡では鉄や木などの製品が朽ちてしまうことが多いのに対して本遺跡では低湿地という地理的条件により、中世の人々の息吹を伝えてくれる貴重な資料が数多く得られ、中世の民衆生活の営みはより具体的に解明されていくと思われる。

古墳時代では氾濫による砂礫層下に埋没していた古墳が発見され、大きな成果を得ることができた。この低湿地に立地する壷形埴輪を伴う古墳は四世紀末から五世紀初頭の築造と考えられ、甲府盆地西縁で最も古い5世紀初頭の物見塚古墳[注1]との関わりをはじめ、甲府盆地における、古墳時代の政治過程の解明に新たな問題を提起することとなろう。

弥生時代後期末では地震跡[注2]が検出され、古環境復元への新たなアプローチとして、今後多くの情報を提供してくれることになろう。

以上、Ⅲ・Ⅳ区の調査により様々な成果が得られ、また多くの課題が提起された。今後はⅠ・Ⅱ区の調査成果と合わせ、検討していきたい。

注1　櫛形町教育委員会　六科山遺跡調査団　『六科丘遺跡』　1985　櫛形町上野の台地先端に占地する全長48mの前方後円墳であり、埴輪は検出されていない。

注2　地震跡はⅠ・Ⅱ区の弥生時代後期後半の文化層においても確認されている。

# 調　査　組　織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　Ⅲ区　小林健二（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
小泉　敬（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
Ⅳ区　保坂和博（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
松土一志（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理員　Ⅲ区　浅野賢一、厚芝照子、石原和幸、石原京子、伊藤としの、井上和美、井上ことじ、井上とめ子、井上巴江、井上ひさ江、井上増美、井上八重子、上田　盈、大木克仁、大木秀子、大森喜美子、大森武雄、川住照子、河住初美、功刀四郎、河野静夫、河野正之、桜田光江、佐藤澄子、佐野ハマ子、塩沢金之介、清水里美、清水好子、志村磯江、志村教子、鈴木うた子、千野里美、土屋直光、鶴田満雄、土井みさほ、新津多恵、西川真人、野沢友彦、樋口きくゑ、樋口久子、深沢秀子、深沢弘子、細川初三、山崎清子、吉岡伸明、依田一賀、依田昌一
Ⅳ区　秋山欣三、浅野美代子、厚芝成美、有泉登茂子、石川和江、石川百枝、石川幸子、石川恭子、内池宣子、大久保武志、大森権蔵、大堀次雄、小田切ちよみ、小野節子、小野嘉子、河西幸子、河西孝子、河西好恵、川住好恵、菊池富士子、河野なみ江、斉藤増子、斉藤幸子、桜林文雄、塩沢智津恵、志村福男、神宮寺正義、杉本政子、山本テルヨ、田中虎雄、千野正雄、戸田恒子、中込芳則、名取明子、西海元子、根岸由起子、原田ちづる、松野充延、松野なを美、松本しま子、望月栄、望月泰子、矢崎孝子

協力者・機関　井上栄一、小川和茂、甲西町教育委員会、甲西町役場

# 報　告　書　概　要

| | | |
|---|---|---|
| フリガナ | | ダイシヒガシタンボイセキ |
| 書名 | | 大師東丹保遺跡２ |
| 副題 | | 一般国道52号改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 |
| シリーズ | | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第102集 |
| 著者名 | | 小林健二・小泉　敬・保坂和博・松土一志 |
| 発行者 | | 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局 |
| 編集機関 | | 山梨県埋蔵文化財センター |
| 住所・電話 | | 〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曽根923　ＴＥＬ0552-66-3881 |
| 印刷所 | | 株式会社　少國民社 |
| 印刷日・発行日 | | 平成７年３月27日・平成７年３月31日 |
| 大師東丹保遺跡（だいしひがしたんぼいせき） | 所在地 | 山梨県中巨摩郡甲西町清水字川原田227-1 他 |
| | 25000分の１　地名・位置・標高 | 小笠原 北緯35°35′09″ 東経138°29′41″ 標高約245m |
| 概要 | 主な時代 | 弥生時代後期、古墳時代前期、鎌倉時代 |
| | 主な遺構 | 古墳時代前期末葉の古墳、鎌倉時代の掘立柱建物跡・水田跡・水路・溝状遺構・杭列 |
| | 主な遺物 | 弥生時代後期の土器・木製品・動植物遺存体、古墳時代の土器・動植物遺存体、鎌倉時代の土器・中国製磁器・木製品・鉄製品・石製品・銅銭・動植物遺存体 |
| | 特殊遺物 | 古墳時代前期末葉の壺形埴輪、鎌倉時代の木簡 |
| | 特殊遺構 | 弥生時代後期の地震跡 |
| | 調査期間 | 平成６年５月11日～12月27日 |

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第102集

1995年３月27日　印刷
1995年３月31日　発行

# 大師東丹保遺跡２

編集　山梨県埋蔵文化財センター
　　山梨県東八代郡中道町下曽根923
　　ＴＥＬ　0552-66-3881
発行　山梨県教育委員会
　　建設省甲府工事事務所
　　日本道路公団東京第二建設局
印刷　株式会社　少國民社